

ウクライナ難民 心のケアを

「精神的ダメージ相当大きく」

ロシアが侵攻を続けるウクライナから避難した人を治療するため、隣国ハンガリーの避難所で、国際医療ボランティア団体「AMDA（アムダ）」（岡山市）に登録する医師や看護師らが支援を続けている。東京都の医師、鈴記好博（すずき）さん



（56）写真＝は平成23年の東日本大震災など災害地域で活動した経験を生かし、現地で2週間にわたって医療支援に従事。帰国前に産経新聞のオンライン取材に応じ、「難民の精神的ダメージは相当大きく、長期的な心のケアが必要だ」と訴えた。

（田中一毅）＝1面参照

日本人医師 避難所で従事

鈴記さんは4月3日にハンガリーに入国。約2週間、国境近くの村・ベレグスラーニーの元学校の建物に設けられた避難所の仮設診療所で活動した。

避難所は、ウクライナ難民が次の目的地に行くまで半日から1泊ほど滞在する施設だ。アムダによると、3月には1日最大千人の人が戦火を逃れて避難してきた

たが、4月には平均200人ほどに。ただ、露軍による東部への大規模攻撃が始まり、19日には約300人が逃げてくるなど、再び増加しつつあるという。



避難してきたウクライナ人の子供に話しかける鈴記好博医師



避難所の敷地内にある仮設診療所。アムダのメンバーらが活動している



仮設診療所には1日十数人、数十人が訪れる。鈴記さんの滞在中、治療を受けるにはほとんどが高齢者や女性、子供。「ウクライナ人は遠慮がちだが多く、ぎりぎりまで我慢する。積極的に話しかけ、困ったことがないか気にかけた」という。

民間人の遺体が多数みつかったブチャから避難してきた高齢女性は、避難所で一夜を過ごしてスペインへ移動する直前、鈴記さんに「頭をけがしたから、消毒してほしい」と打ち明けた。それまでは帽子をかぶり、痛がるそぶりも見せなかったが、診察すると、頭部が陥没していた。

女性は「1カ月前、家が露軍の爆撃を受け、がれきが頭に当たった」と説明し、泣き出した。「どれだけ過酷な状況だったのだろう」と鈴記さんは話し

た。また、首都キーウ（キエフ）から幼児と小学校高学年ぐらいの子供2人と避難してきた40代の母親は「露軍のロケット弾が目の前に飛んできた」と興奮状態で話し続けた。「下の子供は毎日泣き、上の子供は数日間、何も話さなくなった」とも説明した。

そんなウクライナ人たちはとコミュニケーションを図り、心のため込んだつらい気持ちを打ち明けてもらうため、鈴記さんは診療所ではなく、難民が滞在する避難所に寝袋を持ち込んで寝泊まりした。東日本大震災などの災害地域で活動した際に「医師に直接話すことが考えたい」

「難民に対しては心のケアと、就職や教育などの生活支援が極めて重要となる。日本に帰っても何ができるか考えたい」

医療面の人道支援広がる

ロシアによる侵攻で国内外に避難するウクライナ人を医療面で支援しようと、さまざまな国際ボランティア組織が活動している。「AMDA（アムダ）」

はNPO法人「TICCO（ティコ）」（徳島県）と連携し、医師や看護師らを2週間ごとにハンガリーに派遣している。現地では3月7日からオランダ在住の日本人医師らが調整役として入っており、医師や看護師の医療チーム4人の到着とともに10日から医療活動を本格的に開始した。アムダは現在、32の国・地域に支部があり、日本では約600人の医師や看護師が登録している。

一方、国際医療援助団体「国境なき医師団」（MSF）は現在、330人態勢で支援にあたっている。ウクライナ各地の医療機関に聞き取りを行った上で必要な医療物資を輸送。東部の医療機関で治療を受けていた患者を西部の医療機関まで搬送する列車をこれまでに6本運行し、計約270人を運んだという。